



Title	国語問答 ホアン・デ・バルデス(翻訳-5)
Author(s)	Valdés, Juan de; 中岡, 省治
Citation	大阪外国語大学学報. 1982, 59, p. 85-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80922
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国語問答

ホアン・デ・バルデス (翻訳—5)

中 岡 省 治

これまで4回（大阪外国語大学学報第30号，36号，38号；Estudios Hispánicos 第7号）に Juan de Valdés 著，*Diálogo de la lengua* の訳出をおこなってきたが，以下はその続きである。

この翻訳のテキストには Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, edición y notas de José F. Montesinos, Clásicos Castellanos, No. 86 (Madrid, 1953) を底本として用い，その他，Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Clásicos Ebro, No. 18 (Selección, estudio y notas por Rafael Lapesa, Zaragoza, 1965); Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Clásicos Castalia, No. 11 (Edición, introducción y notas de Juan M. Lope Blanch, Madrid, 1969), Juan de Valdés *Diálogo de la lengua*, Biblioteca Clásica Universal, No. 12 (Prólogo y notas de Felix F. Corso, Buenos Aires, 1940) を適時参照した。

この言語問答には Valdés と他の三人，Marcio, Pacheco, Coriolano とが参加するが，これらの問答者を訳文では夫々の頭文字で示している。なお以下に訳出した部分は上記テキストの107ページ6行目から，130ページ27行目までに該当する。

A continuación aparece una traducción parcial del *Diálogo de la lengua* compilado por Juan de Valdés en 1535 en Nápoles y publicado por el egregio lingüista Mayáns y Siscar por primera vez en 1777.

Parte de la obra también traducida que precede a la presente fue publicada en el Journal of Osaka University of Foreign Studies, ediciones 1972, 1975 y 1982 y la revista Estudios Hispánicos, edición 1980.

M. すると，あなた様が使われないそれらの単語を使う人が他にいますか。

V. ええ，そういう人がいますね。ですが教養のある人や正しい言葉づかいをする人ではありませんよ。あなた方そういう単語を，カスティリア語の韻文で書かれている沢山の道化芦屋や牧人劇の脚本とか，昔の本の一部で読むことも出来るでしょうが，現代のものにはないでしょうね。

M. そのお話はそれで結構です。さて，あなた様がお始めになったこの単語のお話，私たちの質問をお待ちいただくまでも，そちらのお考えの順序にしたがい次々とお進めいただきたいのです。

V. 承知しました。私は buelto (濁った) は使いません。turvio が使えるのですから。但し諺

には《A río buelto ganancia de pescadores》⁽¹¹⁾ となっていますがね。私はまた barajar (けんかする)は使いません。これも contender といえいいのですから。昔はその barajar を使い、諺にもあるように、《Quando uno no quiere, dos no barajan》⁽¹²⁾ としてよかったのですがね。私は cabero (最後の) も çaguero (最後から二番目の) をも使いませんね、これらの語は正しい話し方からは追放されてしまい、それに代わって今は último と postrero とがあるので、cobijar (覆う) よりも cubrir の方がよりいい単語です、但し諺には《Quien a buen árbol se arrima, buena sombra lo cobija》⁽¹³⁾ となっていますけれども、cuvil (河床) という語は、《A los años mil torna el agua a su cuvil》⁽¹⁴⁾ というような諺で確認されていますが、もう私たち使わないのです。これと同じことが gastar や corromper に代えての cohonder (損ねる) にも起っているのです、もっともこの cohonder は《Muchos maestros cohonden la novia》⁽¹⁵⁾ という諺に使ってはいますがね。hacia (の方に) に代えて cara を用いる人がいますが、私はもはやそれを使いません。また、siempre の意味で cada que という人もありますが⁽¹⁶⁾、私はそれが正しいとは思わないのです。primo hermano の意味での cormano を私たちはすでに捨ててしまいましたけれど、もしこれを再度請け戻すことが出来るものならそうしてもいい心境ですね。といいますのは、その単語は実に上品なものであるのに、私の見るところ、これまで実に不当な扱いを受けてきたのですから⁽¹⁷⁾。cuita (苦労) に代えて fatiga といい、昔は cocho (煮込料理) といったのを今私たちは cozido としています。porque (というのは) の意味での ca は時の経過と共に軽んじられ、不当にも破棄されてしまいましたが、これは私にとってはたまらなく魅力のある、何ともいえぬ古の香をたたえた単語なのでしてね。No busques の意味でかつては no cates と使っていたようで、《Al buey viejo no le cates abrigo》⁽¹⁸⁾ とか《Haz bien y no cates a quien》⁽¹⁹⁾ とかいう諺があります。また、とても変った意味で、《Barva a barva, vergüenza se cata》⁽²⁰⁾ という諺に出る場合のように cata を使うことがかつてはあったのです。silla (椅子) の意味での cadira はとても不躰なことばですが⁽²¹⁾、俗間ギリシア語が同じ意味で candela といいますので、私はこの cadira がおそらくは古語から残った単語のひとつではないかと思うのです。trabajar (働く) の意味での costribar は、かつては《Quien no come, no costriba》⁽²²⁾ と使いましたが、今ではもう使われません。

M. 仲々結構なお話です。どうぞその先をお続け下さい、私、興味津々なのですよ。

V. 昔の人は vezado (慣れた) や acostumbrado の意味で ducho といっていました、これは次のように、《A quien de mucho mal es ducho, poco bien se le haze mucho》⁽²³⁾ として諺に出てきています。しかし、これは今ではもうよろしくはないでしょうね。“寝坊”の意味で durmiente 使い、《Al raposo durmiente no le amaneca la gallina en el vientre》⁽²⁴⁾ という風というのも適当だとは思えません。また、一部の人々が詩で使っているものでも私が散文には決して用いないものもあるのです。例えば de ai の意味で dende とする場合ですが、これは《La dama que no mata ni prende, tirala dende》⁽²⁵⁾ のように、何ともいえない快い響きの一句にも

出てきていますし、その他にも使われてはいるのですけれどもね。quando に代えて desque を使い、quando vais に代え desque vais とする人がありますが、これは不適当ない方です。mi amo (私の主人) や mi señor という代りに mi dueño とする人があります。この dueño は、《Adonde no está su dueño, allí está su duelo》⁽¹⁶⁾ や 《Dado de ruín, a su dueño parece》⁽¹⁷⁾ とするには適当な単語なのですが、最初にいったような言い方でそれを使うのはよろしくありません。

C. 私、ある男性のことを mi dueño というのを聞いたことがありますか……

V. 誰の肩をもってあなたがそう言っているかよく分かっていますよ、それはそれで自由にさせておいてやりなさいね。さて、duelo (苦勞) と duelos とは汚い単語だと見做され、これに代えて fatiga と fatigas とを使うのですが、《Duelo ageno de pelo cuelga》⁽¹⁸⁾ とか 《Todos los duelos con pan son buenos》⁽¹⁹⁾ とかいう言い習わしもあるのですよ。一部の人が使う engeño (創意) もげすい言い方だと私は思いますし、これに代えて ingenio を使うことにしています。昔の人は […] の代りに […] を使ったと聞いていますが⁽²⁰⁾、これは今ではもう使われません。levantar (立てる) に代え、かつては erguir といったようですが、これも正しい言い方から追放されてしまい、今では下層階級の人だけがそれを使っています。皆さん方イタリア人もその単語を使っているようで、もし記憶に誤りがなければ、ペトラルカで読んだ覚えがありますね。

M. お説の通りです。

P. 女の人中には preñada (妊娠した) というのは品が悪いとして embaçada というようですが。

V. 私としては embaçado よりも embaçado を、engorral (手間どる) よりも tardar を、encentar (出発する) よりも partir を、era (年) よりも año を使う方がいいと思いますよ。

C. その era はどんな意味ですか。

V. 昔は el año del Señor の代りに la era del Señor といいましたし、今でもこうっている人がいますね。さて次に、《Amigos y mulas fallecen a las duras》⁽²¹⁾ のように諺に出てはきますが、私には falla (不足) よりも falta を、fallecer (不足する) よりも faltar を使う方がいいように思えますね。また fiuzia (信頼) や huzia よりも confianza の方がより適当なものと考えています。feligrés は上品な単語で、私には実に好ましく思えるので、“一教区の司祭に従う信者”を意味する場合だけでなく、身分の高い婦人に奉止する人の場合にも使って、私は、例の“ご婦人の feligreses (取巻き)”などともいって使っているのですよ。

P. なる程、ごもっともなお説ですね。

V. Ganivete (小刀) よりも cuchillo の方がいいし、condesar (しまう) より guardar の方がいい。gallardo (優男) に代わる garrido は、部分的には《Pan y vino anda camino, que no moço garrido》⁽²²⁾ という立派な諺の中に残ってはいますが、今ではもう捨てられてしまっています。mancebo (若者) に代わる garçón も、《Prendas de garçón dineros son》⁽²³⁾ としてそ

れをひいきにしている諺もあるのですが、今ではもう殆んど使うこともなく捨て去ってしまいました。gaván (外套) と balandrán も長年前に使わなくなりました。perdida に代わる galduda も、《Sardina que gato lleva, galduda va》⁽²⁴⁾ として使われてはいますが、低俗なことばです。guisa は常に二つの意味を持っていました。そのひとつは hombre de alta guisa とし、“大身の”の意味になる場合と、もうひとつは cavalgar a la guisa で、現在では a la brida という意味を表わす場合とでしたが、今では我々はこのいずれの意味でも使いません。また昔は a guisa を a manera の意味で用いていました⁽²⁵⁾。Librixa は“齒並びの悪い人”の意味で helgado を挙げていますが、これはアラビア語のように見えるのですが、私には悪くは思えないので、私としては使ってもらえるようお願いしたいですね。また、その語と同じ意味を表わすものが他にないのですから、それを使うこともいいんじゃないでしょうか。henchiu (満たす) は汚なく、下品な単語のようですが、それと同じことを意味するものが他にないものですから、私は何ともし方なくそれを使うことがあるのです。というのも llenar がどんな場合にもぴったりと当てはまるとは限らないので、《De servidores leales se hinchen los ospitales》⁽²⁶⁾ という諺に使う場合などは、私としては仕方がないと思いますね。ejército (軍隊) の意味で hueste を昔はとってもよく使いましたが、今では ¡Si supiesse la hueste lo que haze la hueste!》⁽²⁷⁾ となる諺以外には使いませんね。humilde (謙虚な) の意味での humil は韻文では十分に使えますが、散文の場には合もう駄目でしょう。honra (名誉) の意味を示す honor についても同じだと申しておきましょう。ansia (熱望) の代わりに hemencia ということが、今なお一部の人々の間に残っています。fenestria (窓) とか ventana の代わりに hiniestra とするのは Librixa 以外私は見たことがありませんね。importuno (うるさい) に代えて hito ということも今では殆んどありませんが、この語を使い《Romero hito saca çatico》⁽²⁸⁾ という諺がありますね。沢山の人が veis aquí に代えて he aquí といいますが、私はそれは使いません⁽²⁹⁾。

M. 私の感じでは仲々に洒落て気の利いた歌と思うのですが、その中に響きがどうもよろしくないと思える二語を見掛けました。あなた様はその語についてどう判断されますでしょうか。その二語とは halagüeña (媚びる) と çahareña (馴れない) なのですが。

V. あなたその歌を覚えているのなら、全部を言ってみてくれますか。

M. アベマリアのお祈りと同じように、私はそれを暗記していますが、そのうえに《La dama que no mata ni prende, tirala dende》⁽³⁰⁾ という愉快な一句をもじって作ってあるのでしてね。その歌とはこうなのです。

Ha de ser tan a la mano,
tan blanda y tan halagüeña
la dama desde pequeña
que sepa caçar temprano,
y si su tiempo loçano

çahareña lo desprende,
tírala dende.

(女性とは幼い時から従順で
やさしくしかも愛嬌あるべきものなれば、
それが故にて早々と男心を虜にもなさん。
とはいえ、もしその瑞々しき若き時代をただ堅物に、
取り逃さん女子があるのなら、
そんな女子は女の間から放逐すべし)

V. あなたは私よりもイスパニアのことをよく知っていますね、私この歌は聞いたことがなかったのですが、本当にうまく作ってあり、本当に結構な出来ばえだと思います。例の二語も私はいいのじゃないかと思います、ただ、halagüeña は私には何だかラテン語系の語という感じもするのですが、あえて言わせてもらおうと二語共アラビア語と考えたいですね。çahareña についてはアラビア語であることに私は何の疑念も持ちません。さて、私の思い付く単語のことに返って話を続けると、sangrar (血を抜く) に代えこれまで何度も jassar と人がいうのを聞いていますが、私なら決してそれは使いませんでしょうね。estar hechado (横になる) の意味での yazer は悪くはありませんよ。但し、日常の使用からは殆んど忘れ去られてしまっているものですが、“殆んど” というのは今では墓碑銘にしかその語を見ないものですからね。

M. そのうえに、ここナポリでも “Aquí iaze” (...ここに眠る) で始まる沢山の墓碑銘を目にされることでしょうね。

V. イスパニアでも古い墓碑銘はほとんど全部がそのような文言で始まってますよ。

P. ある歌の中に入っているもので、私たちイスパニア人の間で一番もてはやされているものを皆さん方にお話しようと思いますが 如何ですか、ちょっとした気晴らしにもなるかもしれません。

M. 気晴らしどころか、話していただければ面白いですが、

P. ではと、こういったものです。

Aquí iaze sepultado
un conde dino de fama,
un varón muy señalado,
[leal, devoto, esforçado],
don Perançurez se llama.
El qual sacó de Toledo,
de poder del rey pagano,
al rey que con pena y miedo
tuvo el braço rezio y quedo
al horadar de la mano.

(ここに葬られ眠るのは

高き名を受くるに相応しき伯爵、
知る人ぞ知るのおのこ。
〔忠臣にして、信仰厚く、勇敢の士〕
その名をペランスレス伯という。
この騎士こそ外ならぬ、
トレドの異教徒の王の手中より、
囚われの国王を救い出せし勇者なり。
かの国王、その掌を貫き通さるるも、
その腕しっかと張りて、微動だにさせず、
痛みと怖れを耐え忍びたる豪の者なり。)

この歌如何でしょうか。

M. 仲々いいものですね。感心してしまいますよ。あなたそれを書いて私にくれませんか。

V. それは後のことにしたらどうですか、今は話が中途になっている単語のことを続けてやりましょうよ。

M. そういたしましょうか。

V. Inojos (ひざ) とか hinojos とかいう人がありますが、これに代え私は rodillas ということにしています、もっともどちらも使えるんですがね。下賤な人びとの間では yantar (食べる) といっていますが都では comer というのです。ひとつ諺が《El abad de donde canta, de allí yanta》⁽³¹⁾ として yantar を使っていますね。largo (長い) に代わる luengo ですが、これを使う人は殆んどいませんが、私は進んでそれを使いますし、また《De luengas vías, luengas mentiras》⁽³²⁾ という諺にも出ていますよ。cortar (切る) に代え lisiar という人がいますが、これは古い語で、私の思うところ laedere からくずれて変化したもののようにです。また cortar と lisiar との間に差があって、cortar は一般的に多くのものに対し使えますが、lisiar は“刃物で傷つける”意味しか持ちませんので、私は出来ることなら、我々がこの lisiar の方を捨ててしまうことのないようにと願いたいですね。また事実、我々この動詞を他の意味でも使っていて、とっても肥えた馬を見たら、“está lisiado” といいますし、だれかがあるものをもっとも欲しいと思っていることを言い表わしたい時にはその人がそれに“está lisiado” というのですからね。ここでは意味は少しばかり捻ったものになっていますが、そんな風に使うのですから仕方ありませんね。alegre に代わる ledo (楽しい) は韻文で使われるもので、トレの得業士⁽³³⁾ は《Triste, ledo, tardo, presto》と書き、また《Bive leda si podrás》と歌った詩人もいますが、散文では、正しい書き方をする人ならそれは使いませんね。triste (悲しい) と tristeza (悲しみ) に代わる lóbrego と lobregura ですが、これは実に下品なことばで、都の人々の間ではもう使われません。alabar (ほめる) に代わる loar はまあ語で、《Cierra tu puerta y loa tus vezinos》⁽³⁴⁾ と使っていますね。aunque (…とはいえ) に代わる maguera も徐々にその場を失ってきています。しかし、歌集大全には権威ある歌にそれが頻繁に用いられていて、《Maguer que grave te

sea》⁽³⁵⁾ となったりしていますが、現在ではもう使われません。missa から missar (ミサに行く) という、反復の意味の動詞を作る人があり、《Bueno es missar y casa guardar》⁽³⁶⁾ という諺に使ってあるのを見ますが、私ならそれは使いませんね。mecha (灯心) と torcida とはどちらが正しい単語かについて学問のない女の人たちが言い争うのを聞いたことがあります、私は mecha の方がいいと思いますし、諺にも《Candil sin mecha, ¿qué aprovecha?》⁽³⁷⁾ とありますからね。acordar (覚えている) に代え詩人が membrar を使っていますが、私は散文では使うことはないでしょう。granada (ざくろ) に代わる minglana はもう使われません。nombrar (名指す) または hazer mención (言及する) に代わる mentar をも私たちは使わなくなりました、但し《El ruín, quando lo mientan, luego viene》⁽³⁸⁾ という諺には出ていますよ。entre tanto (一方では) に代わる mientras は、出来ることなら捨ててしまったらいいと考える人もあるようですが、私にはその考えは正しくないと思えるので、可能な限りその語を擁護したいですね。

C. あなた様のお持ちの諺ではそれを使っていますか。

V. ええ、ひとつ、《Mientras descansas, maja esas granças》⁽³⁹⁾ となっているのがあります。

C. それではあなた様それを恐れずにお使い下さい。私がその使用許可をお出ししますから。

V. ご配慮有難うございます。nadie (誰もない) よりも ningunoの方が正しい語です。もっともこの nadie は《Quien a sí vence, a nadie teme》⁽⁴⁰⁾ というあの実に崇高な言い習わしで使われ、不動のものとなってはいますけれどもね。odre (皮袋) と odrero (皮袋職人) は今我々が cuero と botero とで表わす意味をかつては表わしていました。私はきき酒は下手くそですが、odie という語は実にいい単語だと思えるのです。という訳はそれは cuero のように曖昧ではないからです、しかし私はこの odre を無理に使おうとは思いませんね。ただ odreroの方はトレドの予言に敬意を表して使いたいと考えていますが、この予言とは《Soplará el odrero y levantaráse Toledo》⁽⁴¹⁾ というものなのです。

M. それはとっても面白い予言のようですね。お願いいたしますので、その意味をご説明下さいませんか。

V. いやいやその必要はないように思えますよ。もしこんな小さなことに次々とかまけていたとしたら、この話絶対におしまいにならないでしょうからね。次ですが, enemistad (敵意) に代わる omezillo も使わなくなりました。私はこれを時には無理をしてでも使おうと思いますけれども、これはあくまでもびったりとはまる場合のことで、これ以外には使う気はないのですよ。

M. あなた様はそれをアラビア語と思われませんか、それともラテン語と思われませんか。

V. 私は omezillo は homicidio (殺人) からくずれて出来たものじゃないかと考えますが、というのは人を殺したため、世間でいう“世をはばかり生活する”者をアストゥリアスでは homiziado と呼ぶからなのです。despreciar (さげすむ) に代えての popar は、《Quien su enemigo popa, a sus manos muere》⁽⁴²⁾ という諺に使っているようですが、今では私たちはこの語をどんな意味にも使いません。subir (上がる) に代わる puyar も同じで私たちはもう使いません。ただ

田舎の人たちはこの語をうまく使ってはいますけれどもね。また、この語がイタリア語の *pogia* と何か関係があるものかどうか、あなた方調べてみて下さいよ⁽⁴³⁾。 *pregunta* (質問) と *preguntar* (質問する) に代わる *pescuda* と *pescudar* ですが、私にはこれがいいなと思えたことはかつてなかったですね。 *plato* (皿) に代わる *platel* ですが、下層階級の間で用いられる語で、ここでは *asentar* (据える) に代え *posar* もまた使われていますが、これは都の人々の間では使われていません。 *vancal* (腰掛け布) に代えて *poyal* というのは田舎の人の特徴ですが、田舎では *vancos* (腰掛け) よりも *poyos* の方をよく使うことからそうなのだと思うのです。

M. あなた様 *potage*, *caldo* と *cozina* の間の区別をどう付けられていますか。こんなことをお尋ねするのは、古参の兵士たちが、私たちが *bisoños* (新兵) と呼んでいるイスパニアから来た新兵を、*brodo* (薄いスープ) のことを *cozina* とか *potage* とかいったりするといって小馬鹿にしているからなのです。

V. 正しい話し方をする人は、食べるものを調理する場所のことしか *cozina* とはいいませんし、また彼らは田舎の人が *cozina* というものに対しては *caldo* を使っていますが、これこそあなた方のイタリア語が *brodo* といっているものなのです。 *potage* はあなた方イタリア人が *menestra*⁽⁴⁴⁾ と呼んでいるものを意味するために使う単語なのです。村に住んでいる郷士たちは *potage* と *caldo* との間にあるこの区別を知らないくせに、その *cozina* といっている村人たちと同じ話し方をしまいとして、両者の区別を尊重しようともせずについて *potage* といっているのです。こういう事情が分かると、なぜ古参の兵士たちが新兵たちの使う *cozina* とか *potage* とかいう言い方を小馬鹿にするか、皆さん理解出来るでしょうね。

M. 私にははっきりとしました。話を先にお進め下さい。

V. *Higa*⁽⁴⁵⁾ に代えて *puges* という語を使う人があるようですが、品の悪い果実のことにはなりますが、一般に *higa* の方がいい単語と考えられています。

C. どんな点からあなた様はそれが品の悪い果実だとお考えなのですか。

V. 一般にそうだと見做されているということなのですよ。ですが、コリオラノさん、何かお話があればお聞かせ下さいよ。

C. 私言わせていただきますと、その果実は俗にいう程には下品なものでも、恥ずかしさを感じさせるものでもありませんが。

V. でもね、私に最後まで踊らせていただきたいと思いますよ、お願いしますよ、あなた私を一度踊りに引っぱり出したのですからね。

C. そうですね、そうおっしゃるのはごもっともです。

V. 現在ここで皆さん方が使っている *cotal* (そのようなもの) に代え、昔カスティリアでは *quillotro* といっていたのですが、今ではどんな形にせよ使っていませんね。

M. それに代えて何か別の語が出てきたのでしょうか。

V. いいえそのような語はありませんし、またその必要もないのです。というのはその *qui-*

llotro という語は、かつては言わんとする事物を意味する語を知らなかったり、思い出せなかったりする人たちが、ただ便宜的に“例のもの”などというのに使ったというだけの単語ですからね。rentar (利益を挙げる) に代え rendir, renta (収益) に代え riende という人もいますが、rentar と renta の方がいいのです、というのは rendir は“誰か人をやっつけ、その人に敗北したことを無理やり認めさせる”ことをも意味しますので、こうなった人を rendido と呼ぶからなのです。rezio (激しい) に代わる raudo は下品な語で、それを使う人は殆んどありません。fácil (易しい) に代わる raez は古い歌の中に間々使われていますが、もう私たちはそれを捨ててしまいました。但し、私たちはこの raez から rece を作りましたが、この rece は fácil と同じような意味で、《Huésped que se combida, rece es de hartar》⁽⁴⁶⁾ という諺で立派に使われています。loco (狂気の) に代わる sandio ですが、これはポルトガルに生れ、育った語ではないかと私は考えています。今はカスティリアでも使いませんし、昔に使ったかどうか私には分かりません。debaxo (下に) の意味での so ですが、今でも時々使って、《So la color está el engaño》⁽⁴⁷⁾ や《So el sayal ay ál》⁽⁴⁸⁾ のようにいっています。また、so la capa del cielo (大空のもと) としても使いますが、しかし私は debaxo としか使わないからといって、皆さん方に so をやめ他の言い方をするよう勧める積りはありませんね。その使い方を心得ていさえすれば sazón (時期) もいい語ですが、tiempo será (その時節となろう) に代え sazón será という人がいますが、これは間違っています。a la sazón (その時に) というのは正しい使い方、ここから sazonar と sazonado とが出来たのです。vil (卑しい) に代わる soez を私は何冊かの本で読んだことがあります。しかし私にはいい単語とは思えません。yo soy という形に代え yo so という人がいますが、これは韻を合わす場合には使えても、散文では好ましくありません。sobrepujar (しのぐ) に代え sobrar は韻を合わすためには使って支障ありませんが、散文では絶体に使えませんね。cruel (残酷な) に代わる sage は使っているのをこれまでに見ておりますし、また cruel よりも sage の方が“残酷さ”の程度が少しばかり大きいような感をも受けますが、私はそれを使わないし、また使うこともないでしょうね。なお、この sage はラテン語 sagax から出たものでしょう。cosa tardia (時期おくれのもの) に代わる seruenda はこれまで Librixa 以外に私は見たことも読んだこともありませんので、今後も使うことはないでしょうね。しかし、これを意味するような語が他にありませんので、たとえそれが使われても私には間違いとは思えませんね。verdugo (死刑執行人) に代わる sayón はとってもよく使われていますが、verdugo の方がいい単語です。salirá に代えて saldrá という人がいますが、これは salir (外に出る) から出た形ですから、私には salirá の方がいいと思えるのです。arriba (上に) に代わる suso は一時期使われた様子で、《Con mal anda el huso, quando la barva no anda de suso》⁽⁴⁹⁾ のように諺にも出てきますが、もう私たちはこれは使いませんし、とくに格式ばった、かしこまったものには使っていません。《Castígame mi madre, y yo trómposelas》⁽⁵⁰⁾ となる諺を作った人は何を考えていたのか、私には分かりませんが、こういうのはその正体不明の語、trómposelas で一体どうい

うことを言いたかったのか私には理解出来ないからなのです。De buena voluntad あるいは de buena gana (進んで) に代えて de buen talante という人がありますが、この人たち自身もさて書く段になるとそうは書かないのじゃないかと、私思うのです。vez (回) に代わる vegada を私はいくつかの書物で目にしますし、また人がこういうのを聞くこともあります、私ならこう言ったり書いたりはしませんでしょうね。下層階級の間では costumbre (習慣) に代え vezo と、acostumbrado に代え vezado といっていますし、《Vezo pon que vezo quites》⁽⁵¹⁾ とか《No me pesa de mi hijo que enfermó, sino del mal vezo que tomó》⁽⁵²⁾ とかいう諺があります。私たちはこの vezo から enseñar (教える) の意味をもつ vezar を作っていますが、この vezo はほとんどいつも悪い意味に解釈されているのもこれまぎれもないことなのです。例の Amadís de Gaula⁽⁵³⁾ を書いた人は vais に代えて vaiais を好んで使っていますが、私はそれには感心出来ません。derramar (こぼす) に代わる verter ですが、《Agua vertida, no toda cogida》⁽⁵⁴⁾ という短い諺に使ってはあっても、私たちもうこの語を捨て去りましたね。xáquima (おもがい) は頭にかぶせるものなので、ここからそれを cabestro (はずな) の意味で使う人があるのでしょうか。zaque は odre (酒を入れるための皮袋) あるいは cuero de vino (ぶどう酒用皮袋) のことで、“酒に酔った人”のことを estar hecho un zaque ともいうのです。また私はアラゴン地方のラマンチャで⁽⁵⁵⁾、特別に井戸から水をくみ上げるのに使う類の皮袋を zaques と呼んでいるのを聞いたことがあります。これはもう今では使わない語で、私も決して使うことはありません。さて皆さん方、ここに至ってはこれまでの私の話したことが、仮に皆さんから質問を受けて話を進めた場合と比べてみても、大して変りばえしなかったじゃないかなどと、不足を言っても私は認めませんからね。

M. おことば、ごもっともです。しかし、まだまだそれ以上に、もしあなた様がよろしくないとお考えの単語を思い付かれたら、それを私たちにお話し下さるようお願いしたいのですが。

V. もし私がそのことを落着いて考えるとすれば、他にかなりのものを思い付くことでしょうね、但し、ふだんは使わないものなので、今は思い出さないものもありますが、これまでお話ししたのは、私がカスティリアを旅行していた時に人々の言うのを聞いて、それで覚えていたものですが、旅行していて、旅館から旅館へと泊ってゆくうちには、どうしても田舎の人々や少々下品な人々と話をしなければならぬ時もありますからね。しかしこういう事々の中に皆さん方にはカスティリア語の豊かさを察知してもらえるのですよ、というのもカスティリア語は、いわば、沢山に実った梨の中から選取り見取りが出来るほどに膨大な語彙を持っているのですからね。

C. おっしゃること正に動かすことの出来ない真実ですね。

M. 中略語は時々お使いになりますか。

P. その中略語とはどんな意味なのでしょう。

M. 中間を略した語のことです。

P. ますます分からなくなりましたね。

M. いいですか、ある語の最中から、字母あるいは音節を取去ったとき、その語は中略語になったと、私たちっています。例えば、私が *pusieron* に代え *puson* といったとすると、その *puson* は中略語となったということでしょうね。はっきり分かってもらえましたか。

P. ええよく分かりました。

V. ところであなたが私に尋ねたことへの返事としては、私たちが主として二様に中略語を使っているということを言っておこうと思います。そのひとつは、私はいいとは思いませんし、またイスパニアのある地方の俗間でだけ使うもの、即ち *traxeron*, *dixeron*, *hizieron* に代え *tra-xon*, *dixon*, *hizon* とする略し方です。これを私はいいとは思わないと言いましたが、その理由は、物を正しく書くときと自負している人が、この種の話し方を、間違っただけのもの、非難すべきものと考えているからでして、こういうのも彼らは単語相互の連がりやが不快な音声を造り出さないかぎりには、極力、単語は完全な形で発音し、書かれるべきものであると主張しているのでしてね。もうひとつの中略語の方は正しい形と見做されており、また正しいものとして私たち皆が使っておりますが、《*Allá van leyes do quieren reyes*》⁽⁵⁶⁾ とか 《*Do quiera que vayas, de los tuyos hayas*》⁽⁵⁷⁾ などという場合で、ここでは、もしあなた方注意をすれば、*adonde* に代えて *do* としているのが分かるはずです。また私たちは *hijo* に代え *hi* といって、*hijo de vezino* (隣人の子供) に代え *hi de vezino*, *hijo de puta* (売春婦の子供) に代え *hi de puta*, *hijo dalgo* に代え *hidalgo* としています。

C. *Hijo dalgo* とはどのような意味ですか。

V. ここであなた方が *gentiles hombres* (貴族) と呼んでいる人たちのことをカスティリアでは *hidalgos* というのです。これと同じような方法をとって、私たちが動詞を代名詞に合わせる時、いくつかの動詞で中略形あるいは短縮形を作ることもあるのです。つまり、《*Haz mal y guarte*》⁽⁵⁸⁾ では *guárdate* に代わる形が使っております。また、私たちは *en casa del* (の家で) に代え *en cas del* ともいっていますよ。

P. そのような中略語はこれまで私聞いたことがありませんね。

V. すると、次のような諺も聞いたことがないと言えますか。《*En cas del bueno, el ruin tras fuego*》⁽⁵⁹⁾ とか 《*En cas del hazino más manda la muger que el marido*》⁽⁶⁰⁾ などですが。

P. そういう語なら私、聞いたことがあります、しかし思い出せませんでしたね。

V. また *desde la ventana* (窓から) に代え *de la ventana* ともいっていますが、この言い方は韻文のみならず散文でもあって、*desde Parla* に代え 《*De Parla van a Puñonrostro*》⁽⁶¹⁾ と使っているのですからね。 *deshazer* (こわす) に代わる *deshar* ですが、あなた方これを韻をふむときに見掛けることがあるかもしれませんが、散文ではもう使っていないので、これを話したり書いたりするときには用いないよう注意した方がいいですね。私たちは *dicen* (…ということだ) に代え *diz que* ともいいますが、これは悪くありませんよ。

M. さて、もしあなた様がそういう中略語についてもうそれ以上のお話の要なしとお考えでし

たら、カスティリア語には多義語が多いかどうかについてお話し下さいませんか。

P. “多義語”というのはどう理解したらいいのですか。

M. ラテン語の話者はひとつ以上の意味を持つ語をそのように呼んでいるのですよ。しかし、あなた方のカスティリア語にはそれを意味する適切な単語がないと思うのですが。

V. その通りです。ですから私はいつもラテン語を使っていますが、大体、ほとんど皆がその意味を分かってくれるようですね。ところで、あなたへのお返事として申しますと、私たちは沢山の多義語を持っていて、他の言語ではこの曖昧さは欠点となるかもしれませんが、カスティリア語ではむしろ光彩を添えるものなのです。というのもそれら多義語を使って、非常に微妙で、洒落た、粋なことごとをいろいろ言えますからね。

M. もし今あなた様がおっしゃったようなことを何か覚えておられるようでしたら、それを私どもにお聞かせ下されば有難いのですが。

V. 私に思い浮んだものがあれば喜んであなた方にお話しをする積りですが、ただ次のことは話をするに際しての条件としておきますよ。つまりこういう類の話というのは話をする本人にとってみれば何ともしまねなく面白いものですが、それを聞く方の人には退屈なこともあるので、もしあなた方に、私がそんな話にすっかり夢中になり一人で喜んでいると分かったような時には、私にそれを注意して教えてほしいということですよ。

P. そんなことでしたら、この私にその役目をお任せ下さい。

V. Correr (走る) は currere というそれ本来の意味の他に、人からからかわれ、愚弄されて腹を立て、“顔を真赤にする”⁽⁶²⁾ という時にも使うのです。さて、以前に、身体が痩せているうえに、しかも痩せ馬に乗っているためいつも皆からからかわれる騎士がいたのです。彼はこれが嫌で仕方なかったのですが、この人にあててもう一人の騎士が歌を作って、こう読んだのでした。

Vuestro rocin, bien mirado,
por compás y por nivel,
os es tan pintiparado
en lo flaco y descarnado,
que él es vos, y vos sois él:
mas una cosa os socorre
en que no le parecéis:
que él de flaco no corre
y vos de flaco os corréis.

(貴殿の痩せ馬を、つぶさに見れば、
その歩幅と背丈のほども、
痩せて、肉の削げたるその様も
貴殿にそっくりそのままに、
馬は貴殿に、貴殿は馬とも見まごう程。
とはいえ貴殿が馬には似られぬ点、

ひとつあることこそ救なり。
これつまり、馬は瘦せたが故、走りえず、
貴殿は瘦せたが故、恥じ入られる。)

M. あなた様、この歌をお称めになったその理由よく分かりますね、本当にうまく工夫されておりますものね。

C. 私はその *pintiparado* (よく似た) という語の表わす意味がよく分かりませんが。

V. あまり気にすることはありませんよ。まあ、そのうちに分かるでしょうから。さて、次ですが、*ostia* (いけにえ) はすでに皆さんもご承知のように祭壇に供えられるものです。

M. ええ、私はそう、承知しておりますが。

V. またあなた方は、魚貝類のうちで *ostias* と呼ばれるものがあることも知っていますね⁽⁶³⁾。

M. ええ、それも知っております。

V. そうすると次には、あの Antonio de Velasco 氏がある歌の中で、この語を使っていとも鮮やかにことばの遊びをやっているのを見てもらいましょう。このような筋書きになっています。Antonio de Velasco 氏が、たまたま彼のとある所領に赴いたとき、そこに、自分の所属する僧兵団の団長 Hernando de Vega 師の反対をおして、僧兵長の階位を受けミサを主宰しうる僧となるための認可を得んがためローマに行って帰りの僧侶が居合わせ、断食の一日を過ごしていたのでした。しかし彼は空腹に我慢出来なくなり、また宿屋には食物が見当らなかったのも、Antonio de Velasco 氏の邸に使をやり、少しばかりの魚を分けてくれるように頼んだのです。Antonio de Velasco 氏はこの僧侶のローマへの旅行にまつわる話をよく承知していたので、直ちに二枚の大皿に挟み込んで次のような歌を書き送ったのです。

Ostias pudiera embiar
de un pipote que ahora llega,
pero pensará el de Vega
que era[n] para consagrar.
Vuessá merçed no las coma,
de licencia y'os despido,
porque nunca dará Roma
lo que niega su marido.

(出来うればお手許に届く大樽にて、
尊師にかきを献上いたしたくも、
そうすれば Vega の君はそのかきを
神へのお供え物とお考えになられよう。
尊師、それらのお供えは食されぬこと、
私め、尊師に食されるための許可をいささじ、
かく言うは、妻ローマその夫が拒むものを
決して認めることなきがためなり。)

またこれに加えて、次のことをも心得ておいて下さい。上の Roma（ローマ）という個所にはもうひとつの面白さがあって、これはかの Isabel 女王が少しばかり鼻が低かった (narices un poco romas) ことと、またこの女王がその歌の僧兵長を庇護されている様子ではあったが、最終的にはその夫である国王の意に反してまで彼を庇護されることはないだろうということにも言及しているのです。

M. 私にはその歌実に巧みに出来ていて、面白さも格別で、もうそれ以上に望むところもありませんし、またそれを作った人の才知のほどもしのべれますね。結論としては、あなた方、スペイン人はこの種のことに並外れた才能をお持ちであることこれまた確かですね。〔続く〕

Diálogo de la lengua, 129 ページ, 17行目まで。

〔註記〕

- (1) A río buelto ganancia de pescadores: “流れの濁った川には漁師の利益がある”とは、騒動やどさくさにつけ込んで漁夫の利を占めようとするようなやり方を皮肉ったもの。
- (2) Quando uno no quiere, dos no barajan: “一人が望まないなら、二人は争わない”とは、けんか両成敗の意。
- (3) Quien a buen árbol se arrima, buena sombra lo cobija: “良き木に寄りかかる人を、良き陰が庇護する”とは、寄らば大樹の陰の意。
- (4) A los años mil torna el agua a su cuvil: “千年たてば、水はその川床に帰る”とは、長年月を経た後には、物事がその元の状態に立ち返ったり、使われなくなったものでもまた使われることもあることを教えた諺で、Al cabo de los años mil, vuelve el agua por do solía ir とか……vuelven las aguas por do solían ir などの言い方もある。
- (5) Muchos maestros cohonden la novia: “多くの教師が許嫁をだめにする”とは、教師口調など仕事のうえでの習慣は他の生活の場面でも出やすくなるので、こういうことを心して慎めと教えたもの。
- (6) siempre (いつも) は副詞で, cada que (…する度に) は接続詞である。
- (7) cormano=cohermano; これは現代語での primo hermano に等しく, “肉身の伯父、伯母の子供、つまり血のかよった従兄弟をいう。
- (8) Al buey viejo no le cates abrigo: “年老いた牛のために外套を捜すことはするな”とは、経験者に忠告、勧言をすることの愚かさを教えたもの。A buey viejo no le cates majada, que él se la cata ともいう。
- (9) Haz bien y no cates a quien: “善を行ない、しかもその相手を見るな”とは親切は人を見ておこなうものではないと教えたもの。なお、この catar は mirar の意味になる。
- (10) Barva a barva, vergüenza se cata: “面と向かっていれば、恥ずかしさが感じられる”とは、ある人がその場にはいない時よりも、実際にいる時の方がその人に対する配慮、敬意が大きくなることを教えた諺。なお、Barba a barba honra se cata ともいう。またこの諺の解釈についてはまったく別の意味も指摘されている (Diálogo de la lengua, Clásicos Ebro, pág. 84, nota, 195)。
- (11) cadora (椅子) は、ギリシア語 cathedra がラテン語を経てイベリア半島に入ったもので、これをカスティリャ語がカタラン語を介し取り入れたと考えられている。15世紀ではいまだ文語と見做されているので、この点で Valdés の意見は少し疑問視される。
- (12) Quien no come, no costriba: “食べない者は働かない”とは、食べものが十分でないと力が出ないと教えた諺。costribar は本文にもあるように, “hacer fuerza, trabajar con vigor” の意。
- (13) A quien de mucho mal es ducho, poco bien se le haze mucho: “多くの不幸に慣れ親しんだ人にはほ

- んの少しの幸せが大きなものに思える”とは、逆境のあとに訪ずれた幸せが如何に有難く感じられるかを教えたもの。なお, ducho “慣れた, 親しんだ”の意。
- (14) Al raposo durmiente no le amanece la gallina en el vientre: “眠れるきつねには, その腹の中で鶏が朝を告げることがない”とは, 怠け者を戒めた諺。
- (15) La dama que no mata ni prende, tírala dende: 男を悩殺もせず, 男心を捕えもしない貴婦人は, そこからほうり出せ”とは, 男にとって魅力のない女性は女性としての値打のないことを教えた諺。
- (16) Adonde no está su dueño, allí está su duelo: “その主人のいない場所には, その人なりの苦勞がある”とは, 召使は, その仕える主人次第で様々な経験をすることを教えた諺。
- (17) Dado de ruin, a su dueño parece: “下賤なる者のさいころはその主人に似る”とは, 主人, 持主の悪癖はその一家のもの, 持物にまで及ぶと教えたものか。
- (18) Duelo ajeno de pelo cuelga: “他人の悲しみは毛からぶら下っているようなもの”とは本当の悲しみというものは関係のある本人でないと分からないと教えたもの。
- (19) Todos los duelos con pan son buenos: “パン付きの疲れはいいものだ”とは, 便利な手段とか先行きに見込みがあってする仕事は少々つらくても耐えられることを教えたもの。Los duelos con pan son menores という形式もある。
- (20) [...] の部分はテキストも空白となっている。110ページ, 8行目。
- (21) Amigos y mulas fallecen a las duras: “友とらばとは困ったときには不足する”とは, 必要なとき, 困ったときの友達, 援助は仲々得られないと教えたもの。
- (22) Pan y vino anda camino, que no moço garrido: “優男ではなく, パンとぶどう酒とが道を歩くのだ”とは, いくら眉目秀麗であっても, それだけでは生活してゆけぬことを教えたもの。
- (23) Prendas de garçón, dinero son: “若者の衣服はお金だ”とは, 若い人には金や物を借し与えても回収の見込みありといったものか。
- (24) Sardina que gato lleva, galduda va: “猫のとった鰯は行方不明だ”とは, ひとたび被害などを受けるとその修復が大変だと教えたもの。
- (25) a la brida: 馬のあぶみを長くして, 騎手が前傾して馬を走らせる乗馬法をいうらしい; a manera は a manera de sombrero (帽子として, のようにして) という使い方をする。
- (26) De servidores leales se hinchon los ospitales: “忠実なる従僕で病院がふくれあがる”とは, 人に使われる者たちの怠けぐせを皮肉ったもの。
- (27) ¡ Si supiesse la hueste lo que haze la hueste!: “もし軍隊がその軍隊がおこなうことを知っていたならば”とは, 物事をあからさまに全員に知らせてしまうと期待した結果が得られないこともあると教えたもの。
- (28) Romero hito saca çatico: “しつこく物乞いをする巡礼はパンの皮を引出す”とは, あまりしつこく要求すると望むものは何も得られなくなることを教えたもの。
- (29) he aquí: He aquí la verdad (ここに真実がある) として, 現代語で使う形である。
- (30) : 前出(15)
- (31) El abad de donde canta, de allí yanta: “僧院長はその歌を歌うところのあがりで食べる”とは, 各人は夫々に仕事をし, その報酬で生活せねばならぬと教えた諺。
- (32) De luengas vías, luengas mentiras: “長い道のりには, 長々としたうそがある”とは, 昔のことや遠く離れた国のことなどの話になると, うそやほらが出やすいことを言ったもの。
- (33) ラ・トレの得業士 (bachiller de la Torre) とは J. Rodríguez de Padrón を指す。15世紀の詩人で, その作品は Cancionero de Baena に収められている。なお本文中にみられる《Bive leda si podrás》(お前もし出来うれば, 朗らかに生きよ) は諺ではない。
- (34) Cierra tu puerta y loa tus vezinos: “お前の家の扉を閉め, それから隣人を称めよ”とは, 壁に耳あり, 人のことを話すには多大の注意を要することを教えたもの。

- (35) これも諺ではなく、歌の一節。“お前にとっては重大であろうとも”の意。
- (36) Bueno es missar y casa guardar: “ミサに参って、家をしっかり守るのはいいことだ”とは、神を敬まい家庭を大切にせよと教えたものか。
- (37) Candil sin mecha, ¿qué aprovecha?: “灯心のない油灯は一体何の役に立つ”とは、中途半端なものは何の用もなさぬことを教えた諺。
- (38) El ruin, quando lo mientan, luego viene: “けがらわしい奴は、その名を口にするだけで、直ぐに現われる”とは、いまいましいこと、いとわしいことなどを軽々に口にするなど教えたもの。
- (39) Mientras descansas, maja essas granças: “お前が休んでいるうちに、その石炭を粉々にせよ”とは、自分一人が休んで、他人に仕事を強制することの非道さを戒めたもの。
- (40) Quien a sí vence, a nadie teme: “自分に勝つ者は、誰をも恐れない”とは、自己を圧え、自己に勝つことのむずかしさをいったもの。
- (41) Soplará el obrero y levantaráse Toledo: “皮職人が大きな息をはき、トレドが立ち上がる”とは、借金などを人に申し入れたりすると、後始末が大変だと教えたもの。これには次のような故事がある。Alvaro de Luna が1449年に、国王 Juan 2世のためトレド市に軍費の貸付をするよう要請したところ、これを知った市民が、Juan 2世に対し反乱をおこし、ある一人の皮細工師に率いられた人々が、トレド市の城門を占拠し、一商人の家に焼打ちを加えるなど、騒乱状態となったという。これ以後、多額の貸付金を要請するときなど、その反響の大きいことを予想してこの表現が使われるようになったと言われている。これが、本文では profecía (予言) という表現で表わされている。
- (42) Quien su enemigo popa, a sus manos muere: “その敵をさげすむ者は、彼の年で死ぬ”とは、油断大敵と教えたもの。
- (43) poggia はイタリア語では、“船の右舷の帆桁に結た綱”を意味するらしい。そうすると、ここで Valdés はどんな意味上の関連を予想していたのだろうか。
- (44) brodo は“薄い肉スープ”, menestra は“肉・野菜煮込みスープ”をいうらしい。
- (45) Higa は“いちじく”のことか。
- (46) Huésped que se combidá, rece es de hartar: “招待される客は満足させ易い”とは招かれもしないのにこのこ出掛けて行く厚顔しい人、いやしい人を皮肉ったものか。
- (47) So la color está el engaño: “色の下にまやかしがある”とは、物事を外見だけで判断するなど教えた諺。
- (48) So el sayal ay ál: “ラシャ地の下に別のものがある”。意味は(47)と同じ。
- (49) Con mal anda el huso, cuando la barva no anda de suso: “糸巻きは、鬚が上から働かない時には、間違っって動く”とは男のいないところでは、きれいな女性といえ何の意味もないといったもの。
- (50) Castígame mi madre, y yo trómpoelas: “私の母よ私をこらしめて下さい。そうすれば私はあなたをあざむきましょう”とは、母親の諸々の心くばりに対しても子供はこれを有難いとは思わぬことをいったものか。この諺の解釈には諸説があり、定説はないとされている。またここで用いられている動詞, trompar は, trampear, entrampar の意味に解釈するのが適当と考えられる。
- (51) Vezo pon que vezo quites: “お前習慣を取り入れ、習慣を除け”とは、習慣、ならわしなどは、ひとつ新らしいものが出来ると古いものがすたれるとの意味か。
- (52) No me pesa de mi hijo que enfermó, sino del mal vezo que tomó: “私は病気になった息子よりも、むしろ彼が覚えた悪癖が心配だ”とは、悪い癖がつくとこれは病気よりも恐ろしいと教えた諺。
- (53) Amadís de Gaula: 1508年 Zaragoza で初版の発行された騎士道物語。
- (54) Agua vertida, no toda cogida: “こぼれた水は全部はすくえない”とは、軽はずみがもとで生じた損失などは全部を完全につぐなうのは不可能だと教えたもの。
- (55) Mancha de Aragón: 16世紀にはラ・マンチャ地方の東部、現在の Cuenca と Albacete の2県をこのように呼んだことがあった。

- (56) Allá van leyes do quieren reyes: “王の望むところに法は行く”とは、権力者というものは自分に都合のいいような法律を作ったり、改正したりするものだとかえたもの。
- (57) Do quiera que vayas, de los tuyos hayas: “どこに行こうとも、お前の仲間を持たんことを”とは、類は類をもって集まることを教えたものか。
- (58) Haz mal y guarte: “悪をなし、そしてお前の身を守れ”とは、悪業は悪業をもって仕返しをされるので、身を慎しめとかえたものか。
- (59) En cas del bueno, el ruin tras fuego: “善人の家では、いやしき者が火のうしろにいる”とは、善人、気持のやさしい人は自分の家の中でさえ、恵まれぬ人に最も居心地のいい場所を与え親切にするものだと教えたもの。
- (60) En cas del hazino más manda la muier que el marido: “貧しい者の家では夫より妻が命令する”とは話し相手の気持を害するようなことは言うなとかえたもの。
- (61) De Parla van a Puñonrostro: “人々はパルラからプニョンロストロへ行く”とはほんのちょっとしたことばがもとで喧嘩になりやすいので注意をせよとかえたものか。なお Puñonrostro は puños de rostro (顔にげんこを喰わせること) か。
- (62) ここで用いられている correr の意味 (avergonzar y confundir) はすでに14世紀から記録にある。
- (63) hostia (お供え物) は語源を hostia (lat.) とする cultismo であるが、ostia は ostra (かき) の意味で、14世紀と15世紀にのみ用いられた形でもある。